

小島祐馬と内藤湖南

岡村敬二

はじめに

湖南内藤虎次郎（以下湖南）と抱甕小島祐馬（以下小島）とは一五歳の年齢差がある。

湖南は慶応二（一八六六）年の生まれ、小島は明治一四（一八八一）年の生まれである。後年ともに京都帝国大学文科大学また文学部の教授となるが、いわゆる同僚として勤務していたのは四年ほどで、湖南が教授として在職している間小島は助教授であった。この時期のことをもう少し詳しくみてみると次のとおりである（略年表も参照）。

大阪朝日新聞二度目の記者であった湖南は、四一歳の明治三九（一九〇六）年二月、参謀本部の依頼により間島問題に関する調査書の作成にあたり、七月にはこの間島問題調査の囑託となった。そして大阪朝日新聞を退社する。間島問題というのは、中国東北部の間島地方に移住した朝鮮人をめぐって清国と日本とがその領有権問題で対立し緊張が高まった軍事外交問題である。一一月に満洲および韓国の視察から帰国した湖南は、翌月には京都帝国大学文科大学学長の狩野亨吉と面談、文科大学の教授に就任することを承諾している（「年譜」『内藤湖南全集 第十四巻』筑摩書房）。この会見は実のところ形式的なもので会見以前にすでに湖南の教授就任の話は出ていたのであった。というのもこの面談より前に、京都帝国大学総長の木下廣次と上田万年東京帝国大学総長とは、三宅雪嶺の文科大学学長就任要請のため、雪嶺と旧知の湖南を遣わしたのだが、この会見で湖南が、雪嶺が学長で自分が教授に就任するということがかかと打診したと雪嶺が明かしているからである（三宅雄二郎「内藤湖南君のこと」『書藝』第四巻九号 一九三四年）。結局雪嶺はその要請を断ったのだが、湖南の方は京都帝大の教官に就くこととなったのである。ただこの湖南の教授就任に対しては法制局が難色を示し、明治四〇（一九〇七）年一〇月の就任は講師であった。教授となつたのはその二年後の明治四二（一九〇九）年九月のことである。

一方の小島は、熊本の五高に在学中であった明治三五（一九〇二）年の冬から翌春にかけて上海から漢口までを旅行した。この時小島は、湖南の著作『燕山楚水』を携行して旅行に出かけている。旅行から帰り五高を卒業した小島は明治三六年京都帝国大学法科大学に入学、そして明治四〇年七月に法科大学を卒業している。この法科大学卒業後に小島は清国に渡る事となる。中国の地に住まわって中国人の教育に従事しながら中国社会を研究しようと考えたのであった（小島「通儒としての狩野先生」『東光』五号 一九四八年）。ところがこの時期湖南のところで述べた間島問題が顕在化する。日本は間島の龍井村に派出所を置き警察官を常駐、清国もそれに対抗したことから日清両国間の緊張が高まった。また日本船の第二辰丸の拿捕に始まる辰丸事件も起きて排日の気運が高まり日本人教師も契約更新がなされず相次いで帰国することとなった。こうして北京で教師になるという希望も叶い難くなり小島は帰国の途につく。そして湖南が教授となった明治四二（一九〇九）年に文科大学哲学科に再入学し狩野直喜に師事して支那哲学史を専攻することとなった。明治四五（一九一〇）年に大学を卒業した小島は京都府立一中の囑託教師をしながら研究を持続する。文

科大学は大正八（一九一九）年に文学部と改編されたが、その翌年小島は青木正児、本田成之とともに『支那學』を創刊、大正一一（一九二二）年八月には文学部助教授に就任した。この文学部で小島は、湖南退職の大正一五年までの四年間をともに過ごすこととなるのだが、小島の教授昇進は昭和六年三月のことで、その間小島は助教授であったわけである。その湖南が郷里毛馬内の蒼龍窟から見晴らす景色とよく似た南山城の瓶原に恭仁山莊を営んで隠棲したのは昭和二年八月、小島は昭和一六年一二月に定年退官となり父親の暮らす高知の春野村弘岡上へと帰郷した。

『支那學』のいま

もう一度文科大学草創の時期にもどる。明治三八（一九〇五）年、京都帝国大学文科大学の設立が決まり、文科大学は翌年四月に第一高等学校校長狩野亨吉や台湾旧慣調査会の狩野直喜ら五名が開設委員となって体制が整えられていく。そして九月には開設となりまず哲学科が設置され狩野はここで支那哲学史を担当した。翌明治四〇年には史学科が設けられ湖南もまず講師に、二年後には教授に就任する。さらに同年東京高等師範学校から桑原隲蔵が招聘されて京都帝国大学文科大学の東洋学はその基礎固めがなされていたのであった。

こうした経緯について吉川幸次郎は小島祐馬への追悼文のなかで、いわゆる「京都支那學」は狩野直喜と内藤湖南とを「二大導師」として発展してきたといい、小島が亡くなった同じ昭和四一（一九六六）年に四日市の自宅で死去した武内義雄とともに、この二人は京都帝大が文科大学を開設したばかりの時期に中国哲学史専攻の学生であったこと、つまり狩野直喜の最初の学生であり、また内藤湖南の中国古代研究についての学説を最初に聞いた学生で、こうした人たちが相次いで亡くなったことになること述べている（小島祐馬博士追悼『函書』一九六七年一月、『吉川幸次郎全集 第十七卷』筑摩書房）。

さらに吉川は、同じくこの時期に狩野らの最初の学生であった青木正児にも言及し、支那學社を結成して『支那學』を創刊した少壮気鋭の小島祐馬と青木正児・本田成之についても回想する。その回想によると、この三者による『支那學』の編集会議は大量の酒がつきものでそこで飲んで気焰を吐くのが常であったが、ある編集会議のあと酒を飲んで橋のたもとの占い師にそれぞれの手相をみさせた。その占い師によると、青木はもともと長生きで九〇歳までも生きるだろうとの見立てだった。だがその見立てはあたらず青木は小島の二年まえの一二月に亡くなっていた。また本田はもともと早くの昭和二〇年三月に死去している。このように京都支那學草創期の学生であった研究者たちがみな亡くなっていることとする状況について吉川は、「狩野氏内藤氏を、二大導師として明治の末に発足したその、第二代の巨匠たちは、今や地を掃うて、尽きようとする。狩野博士最晩年の学生である私にはとくべつの感慨がある。内藤博士の晩年の学生である貝塚茂樹君も同じであろう」と述べたのである。湖南晩年の学生貝塚茂樹は昭和六二（一九八七）年二月に亡くなったが、かくいう狩野最晩年の学生だった吉川幸次郎も貝塚よりはやく昭和五五（一九八〇）年四月

に亡くなった。

この吉川が言及した『支那學』だが、この雑誌に対して湖南は暖かい眼差しをもって見守っていた。『支那學』の表紙に掲げられた孔老会見の図は青木が「金石索」から選び出したものであったが、それ対して湖南は、『支那學』ともあろうものが原拓を用いず「金石索」によったと行って笑ったという（小島「支那學」創刊当時の事ども『支那學』一九四二年）。それでも湖南はこの『支那學』の熱心な読者であった。湖南が渡欧したときに訪れた中国学者の書齋に『支那學』が置いてあったのを見て湖南はそれを大いに喜び小島らを励ました（青木正児「支那學」発刊と私『支那學』一九四二年四月）。

この『支那學』の発行元は当初は彙文堂であった。小島らはこうした学術雑誌刊行が版元に損失をもたらすことが常であることから刊行を逡巡していたところ彙文堂主人大島友道が、もし彙文堂が刊行すると決めたら原稿を寄せてくださるか、「昂然として」問い、彙文堂からの刊行が決まった。そして京都帝国大学支那学会を離れた支那學社を起すことにより発刊に至ったのであった。刊行が決定してまず小島らが詣でて賛助を請うたのは狩野直喜・内藤湖南・鈴木虎雄であった（青木正児「自序」『支那文芸論叢』弘文堂一九二七年）。ところがこの彙文堂の大島は無念にも病で倒れてしまい、その刊行は弘文堂が引き継ぐこととなったのであった。

彙文堂は当時『冊府』という図書目録や小文を載せた冊子を発行していた。その小文というのはまことに自由奔放なもので、それらはおおむね「京大支那學出身在洛浪人連中匿名の暴れ書き」で、東京側学者への悪口も載ったりして、狩野直喜などはそれをずいぶん気にしていた。ところが富岡謙蔵などはこの『冊府』の声援者であり、湖南もそれを楽しみ、『冊府』が後世に残ることになったら、青木君や本田君はまず彙文堂のお抱え文士であったと思われるだろうねと述べたといわれる（青木「内藤湖南先生逸事」『支那學』一九三四年七月）。この『冊府』に青木は瓢公の署名で「暴れ書いた」のだが、その文章は青木の全集第七巻に収められ、『冊府』は創刊号から京都大学附属図書館に残されていてそのお抱え文士ぶりも知ることができる。

『燕山楚水』のいつ

このように、文科大学草創期の学生であった小島にとっても、また卒業後の小島にとっても湖南は「導師」といふべき存在であった。そんな小島が湖南の「警咳に接した」のは明治四二年の春、湖南宅であったと小島は述べるが、小島が内藤湖南という存在に大きく影響も受けたであろうと思われるのはそれより七年ほど前に刊行された『燕山楚水』によつてである（小島「湖南先生の『燕山楚水』」『支那學』一九三四年七月）。

『燕山楚水』は明治三三（一九〇〇）年六月に博文館から刊行されたものである。湖南は明治三二年八月末から三か月間にわたつて宿望の中国遊歴が叶い、それを『万朝報』誌に掲載した記事をまとめて出版した。『燕山楚水』という題目は版元がつけたもので湖南のつけた書名は『禹域鴻爪記』であった。

『燕山楚水』の刊行三年前に湖南は『近世文学史論』を出版している。これは大阪朝日新聞に連載した「関西文運論」を改題したもので、三宅雪嶺の序がつき、また湖南の旧友畑山呂泣の序文も付されている。この序文で呂泣は、「君みずや、禹域四百州、風雲箭の如く、烟霧墨の如し、盍ぞ速かに君が劔を負ひ、君が馬に跨り、直ちに江を渡り河を渡り、北の方萬里の頂上に上りて、出没して平原を望まざる」と書いて、湖南の中国遊歴が宿願であったことを教えてくれている。ところがこの呂泣は湖南の中国遊歴が実現する前の明治三十一年一月に病気で亡くなってしまい、あまつさえ呂泣の遺稿も明治三十二年三月湖南の隣家からおこった火災により焼いてしまっていたのである。そんなことから湖南は『燕山楚水』の冒頭で、秋田の平州小西伝助からの「近世文学論の呂泣が序にも見えたる期望も、こゝにかなひて、泉下の亡友も定めて満足すらん」との書翰を引いてその今昔の感慨にひたる。そして湖南自身も呂泣の先の序を引用した上で、「彼は此文を絶筆として、終に翌くる年の一月といふに世を去り、吾がその期望に副ふを得待たざりし也。されば吾は旅行の事定まりける翌日、それを告げ知らすべき心にて、谷中なる呂泣が墓には詣でつ」とこの中国遊歴を呂泣の墓前で報告し、その痛切な思いを記しているのであった（『禹域鴻爪記 其一 発程。芝罘。渤海の史論』）。

この明治三十二年という年は湖南にとってはまことに慌ただしい年であった。湖南の言に従えば、三月一二日の夜には隣家からの火事で家は焼け、年来儲蔵してきた書物も焼いてしまい、畑山呂泣の遺稿や、また湖南が幼いころから書き抜いてきたもの、湖南が物してきた稿本などすべて焼いてしまった。四月には長男乾吉が生まれて人からはめでたしと祝われもするがその忙しさは「災難にかはるべくもあらず」というもので、八月からはこの三か月の中国旅行となったというわけである。

中國に渡るにあたって湖南は、日本郵船会社の仙台丸に神戸から乗船しようと考え大阪で用事を済ませたのだが、船の神戸出帆が予想していたより遅いことが分かり、ふとおもいついて奈良に向かう。そして夜遅くに奈良の対山楼に泊まって翌日に西ノ京の唐招提寺金堂を拝観する。湖南は過去に何度もこの唐招提寺を参観していることから寺僧に、この人は幾度も来ているので寺の事はよくご存じだともいわれている。ここで湖南は中国の文人への土産として仏足石讚碑と塔擦銘の拓本を購入し、その後大和郡山から汽車に乗って法隆寺へと向かい、金堂釈迦仏、薬師仏光焰背銘の拓本を得ている。こうして中国の文人たちへの土産を調達し日本を發った湖南は中国の各地をまわり、現地滞在の日本人や嚴復・文廷式・羅振玉ら中国の文人らとも会って筆談をしたのであった。時期がおりしも日清戦争後のことでもあり、この筆談は学問上のこともあったがまた必然的に政治論にも及んだ。当時五高生であった小島が上海から漢口までの旅行の間、このようにして書かれた内藤湖南の『燕山楚水』を常に携行して手離すことはなかったというわけである。

『燕山楚水』と小島

小島の少年期、日清戦争が勃発した。小島はこの戦争に大きな関心を持つことになる。そしてそれに引き続いて起こった三国干渉を新聞などで見聞きすることで欧州列強の東亜諸国に対する圧迫に抵抗感を感じるようになった。こうして少年小島は「ナショナルリズム」を芽生えさせたのであった（小島「選挙干渉と日清戦争」小島文庫資料目録上）。高知一中に進んだ小島は、大橋音羽『累卵の東洋』、坂本喜久吉『康有為氏』などを読み、ますます政治問題への関心を深め、西洋列強の東洋進出を防ぐに中国は大いに強くなつてもらわないと困ると考えた（小島祐馬 桑原武夫「対談 中国文化の源泉を求めて」『展望』一九六七年三月）。こうして少年期に小島はアジア主義的な考えを持つに至ったのである。

明治三三（一九〇〇）年九月小島は熊本五高に進学する。そして先に述べたように明治三五（一九〇二）年冬から翌春までのあいだに学校を休んで上海から漢口まで中国旅行を敢行した。少年期に芽生えさせた政治外交への関心から、現地でいっそう見聞を深めようと考えたのである。旅行に先立ち小島は前もって中国に関する知識を得ておきたいと考え、本や雑誌を調べた。そしてこの内藤湖南の『燕山楚水』に巡り合ったというわけであった。ナショナルリズムまたアジア主義など、政治問題に深い関心を持っていた当時の小島にとつて、「此中に見ゆる先生の支那論は非常に興味深きもの」であり、当時小島が調べることのできなかつたさまざまな書物を参照しながら書かれたこの湖南の長江遊記は「何よりの好案内記」となった。この旅行中に小島は武昌で張之洞『勸学篇』を購入したのだが、この二冊は小島を支那へと密接に結びつけた「好記念」となったのであった。

とはいえこのように湖南の書物を読んだからといって小島は大学に進んで「支那学」を専攻しようとしたわけではなかった。小島は五高から京都帝国大学の法科大学に進む。政治外交問題への強い関心がそうした道を進ませたのである。法科大学在学中に小島は五高で同窓であった花田大五郎とともに京都法政専門学校附設東方語学校で時文を学んだ。時文の担当者は台湾旧慣調査会にいた狩野直喜であった。その狩野には何を尋ねても即座に回答があつてそこには一点の曖昧さなどなかった。小島はこうして狩野と出会うこととなった。

小島は狩野に頼んで陽明全集を読んでもらおうと毎週木曜日に狩野宅に通う。そして明治四〇（一九〇七）年七月に法科大学を卒業しその後小島は中国に渡ることを決心する。中国についての知識をもっと深めまた現地で日本人教習のように教師として雇ってもらえばよいと考えたのである。そして中国に住んで中国人の教育活動をしなから中国の社会・文化をも研究しようと考えた（小島「通儒としての狩野先生」）。そのことを狩野に告げると狩野はおおいに喜び、当時北京にいた桑原隲蔵や服部宇之吉宛の紹介状も書いてくれた。

こうして小島が、中国の地で教師になろうと決意して中国に渡ったその背景には、先の中国遊学の時に携行し読みふけた湖南の『燕山楚水』の影響もあったのではないかと思ふ。本書の「其十 武漢の遊。黄鶴楼。大別山。伯牙台」の項で湖南は、現地漢口の日本人

と会ったこと、船で遊覧して景勝の地を訪ねたことなどを記述する。また張之洞が建てた自強学堂を訪問しそこで働いている日本人の教師三名から授業の模様なども聞いている。張之洞の幕僚汪鳳瀛の農務学堂においても、日本からの教師が二名、少し南方の武備学堂でも翻訳官数人が雇われている事情を報告した上で、このように武昌府在住の日本人はたいていが教師である、と論述されているのである。小島はこの武昌で張之洞の『勸学篇』を購入し、この書物も自身を支那に結びつけた書物であったと書いており、このように『燕山楚水』の紀行や見聞は小島の心情を突き動かし、法科大学を卒業した後には中国にわたって教育活動に従事しようと考えているに至ったのではないかと思うのである。

小島は間島問題など排日運動の高まりのなか、教師になる見込みがなくなったと考えて明治四一年に帰国し翌年法政専門学校で出会った狩野に師事することとなった。

市野迷庵『読書指南』

小島は法科大学に入学した明治四二年の夏前、河上肇を訪問し経済思想史や社会主義経済に関する書物について尋ねている。その訪問以降小島は河上と親交を深め、河上が昭和二一（一九四六）年一月に亡くなるまで師友としての関係を続けた。小島は明治四五年七月に法科大学を卒業し、九月に得た京都一中の嘱託教師をしながら中国社会思想の学びを続させる。大正五（一九一六）年五月には、河上や神戸正雄らが開いていた経済学読書会の席上で湖南が報告をしているのだが、その報告の依頼は小島がおこなった。小島は大正八（一九一九）年に河上の推薦で法科大学から独立した経済学部の嘱託講師となるが、小島はこのように法科大学と法科大学との橋渡しの役割をも担ったのであった（大正五年三月二〇日付河上肇書簡、河上肇全集第二四巻 岩波書店）。

小島は大正一一（一九二二）年八月に文学部の助教に就任するのだが、四年後の大正一五年に湖南は定年退官となり昭和二年には南山城の瓶原村恭仁山荘に隠棲する。この間の湖南と小島の接点についてはあまり材料もない。先の小島の湖南追悼記事「湖南先生の『燕山楚水』」には、小島は支那学を専攻するようになっても政治に関心を持っていたことから、湖南に会うと湖南からその経世論を聞いたと回想している。ただ小島は徐々に政治に興味を失っていき、湖南も晩年にはそんな話はほとんどしなくなったのだという。

湖南が死去したのは昭和九年六月だが、その翌年に湖南と小島の共編で市野迷庵著 洪江抽斎補『読書指南』が弘文堂書房から刊行されている。この次第は先の「湖南先生の『燕山楚水』」によれば次のとおりであった。湖南は、日本人が読書を愛さないこと、とりわけ漢籍を好んで読もうとしない者が多いことについて、その「門逕の正を得ざるに由ること多からずと謂ふべからず」と述べ、読書や学びへの道筋をつけることが何より重要であると説く。そして漢学への門逕として湖南は、張之洞の『輪軒語』の数章と『勸学篇』の守約一篇を挙げているのである（「読書に関する邦人の弊習附漢学の門逕」『燕山楚水』、この湖南の文章は明治三三年三月の稿）。このように湖南は、漢学へと導くべき書物について若い頃から晩年

にいたるまでずっと気に掛けており、そのために草稿でしか伝わっていない市野迷庵の『読書指南』を刊行しようと考えたのであった。出版にあたってはその初校を湖南が担当し、再校は小島が担当して前半部分は校了した。後半も組版までは終わっていたのだが諸般の事情で出版が遅れてしまい、この書の刊行が成ったのは昭和一〇年六月であった。湖南はすでに亡くなっており、この刊行を見ずに湖南は逝ったことになる。小島は、返す返すも残念であると悔やむ。この回想では『読書指南』に続いて徐仁鏞『輜軒今語』、葉德輝『經学通話』も刊行される予定となっていると述べられ、湖南の「初学者に対してどこまでも親切な態度の一斑が窺はれる」と回想しているのである（小島「湖南先生の『燕山楚水』」）。

こうした湖南の漢学を学ぶ者に対する心配りは他にも例がある。大阪府立図書館の開館時のことである。図書館は明治三七（一九〇四）年三月に開館したのだが、その前年には今井貫一が館長に就任し大阪朝日新聞社に挨拶に出かけそこで内藤湖南と天囚西村時彦に会っている。二人はともに図書館蔵書の重要性を説いた。今井はその後も大阪大手町に住んでいた湖南宅を訪問し資料収集にあたってさまざまな教示を請うた。そんな今井に対して湖南は、自らの書庫から『書目答問』を取り出して一、二、三と漢籍購入の順序を朱で記入して図書館での収集について示したという（多治比郁夫「西村・内藤両先生と大阪府立図書館」『なにわづ』三〇 大阪府立中之島図書館、『近世文藝史料 第四卷』青裳堂書店に所収）。初学の者に対する親切な心配りはこんなところにも表れていたのである。

富永仲基『出定後語』

この湖南の「読書に関する邦人の弊習附漢学の門徑」のなかには、近世三百年の間の学者の論述で見るべきものは、富永仲基『出定後語』、帆足萬里『入學新論』、狩谷望之『和名抄箋註』くらいでその他は指折って数えるに足らないものであると述べられている。これらのうちで湖南は富永仲基に高い評価を与えており、後の大正一四（一九二五）年四月の大阪毎日新聞社主催の講演会でも、「大阪の町人学者富永仲基」と題して講演を行っている（『内藤湖南全集 第九卷』）。この講演会は『大阪毎日新聞』一万五千号記念のものであるがまた大阪地域の拡大にもなう大阪祝賀のものでもあったようで、湖南は講演の冒頭で、自分は大都市主義には反対であり今回は大阪毎日一万五千号のお祝いにおいてのみ出かけてきたのだと述べて拍手をあびている。またこの演題は湖南のものではなく大阪毎日新聞の岩井氏がつけたものであったとも述べているのだが、この岩井氏とは、京都帝国大学文学部の国文を出た岩井武俊のことである。岩井は京大に出入りして記事を集め、また当時陳列館にあつてよく人が集まった濱田耕作の考古学教室をカフェ・アーケオロジ―と名付けた人物でもある。この講演会で湖南は大阪下寺町西照寺にある富永家の墓碑の拓本も展覧したのだがその拓本も岩井が用意したものであった。

湖南はこの講演会で富永仲基のことを、「大阪で生まれて、而も大阪の町人の家に生まれて、さうして日本で第一流の天才と云つてよい人は富永仲基であると思ひます」「私のひどく崇拜して居る一人です」と最大限の評価をしている。また湖南はこの仲基について大正

一〇（一九二二）年の懷徳堂定期講演の席上でも話しているのだが、この時点では発見されていないかった「翁の文」が大正一三年に見つかったので、それをさっそく出版したとも述べている（『翁の文』三九丁 小林写真製版所一九二四年六月）。この発見されたという「翁の文」は、同年一月に大阪外国語学校教授亀田次郎が大阪の玉樹香文房で手に入れたもので、それを聞いた湖南が六月に自費で縮写景印本を作成したものである。大正一三年五月二五日の泊園書院学会ではこの「翁の文」（亀田次郎氏蔵）を含めた関係資料が展観され、小島祐馬所蔵の『出定後語』（明治三五年活版刻 赤俣倅ト合本）も出陳されたのであった（水田紀久「富永仲基研究の近況」『富永仲基研究』和泉書院 一九八四年、同書の梅谷文夫「書誌」にこの時の「富永仲基先生関係資料陳列目録」函版がでる）。

富永家代々の墓は大阪下寺町西照寺の境内に東に面して建っている。湖南がそれを初めてみたのは明治三七（一九〇四）年のことであった。この時のことを湖南は翌年一月二二日付大阪朝日紙上に「大阪の一人」と題して記事を載せた。ところが西照寺には富永家一族の墓はあったのだが富永仲基の墓はなかった。そんなことから湖南は亀田次郎とともに仲基の墓を建立して弔おうと考え位牌を作り西照寺で法要を営み二人の関連書物の展観をおこなったのである。ちょうどこの年が『出定後語』刊行から一六〇年、また湖南の尊敬する大阪生まれの慈雲尊者の没後一〇〇年にあたっていたからであった（『内藤湖南全集 第四巻』水田「富永家墓地の現状『富永仲基研究』」。この法要の後にも湖南は大正一〇年懷徳堂講演、さらに大正一三年五月九日には龍谷大学史学会で関連資料の展観とともに講演をおこなっている（龍谷大学史学会出陳目録「高知大学小島文庫資料目録 302」）。そしてこの大正一四（一九二五）年四月の大阪毎日新聞社主催講演会となったのである。このような新聞社主催といった一般公衆相手の講演会で富永仲基のことを話す機会はこれが初めてのことであった。

ここまで湖南の富永仲基評価についてすこし詳しく書いてきたのも実は湖南没後の昭和一二年一〇月三日、富永仲基追遠法会が西照寺において開催されてそこで小島が祭文を読んでいるからである。この会の呼びかけ人は、小島祐馬・亀田次郎・吉田鋭雄・内藤乾吉・勝本鼎一・石濱純太郎で、小島が筆頭に名を連ねた九月二七日付のこの案内状には、湖南が仲基を高く評価し「我国第一流の天才学者」と称していたこと、また「記念祭典を修めるとき意」を常々漏らしていたがそれが果たせなかったことからこの湖南の意志を継いで開催した旨が記されている（高知大学小島文庫資料目録 302）。そしてこの会でも、明治三七年に湖南らがおこなったと同じように仲基を偲んでの展観もなされているのである。小島は架蔵の『出定後語』（文化二年補刻本異本）、『服部蘇門赤俣々』（天明五年刊）を出陳した（水田「富永仲基研究の近況」『富永仲基研究』和泉書院、「富永謙齋先生記念展観目録」高知大学小島文庫資料目録 68）。

なお富永仲基の墓碑については昭和一八年に陸軍中部防空司令部附（大阪）であった羽倉敬尚および石濱純太郎・森繁夫が発起人となって建碑を諮り、この羽倉のはからいで大阪川口の軍部出入りの石材店で墓石を購入し刻字も頼んだ。そして軍の車両で門前まで運び込ませ、町内会青年団の助力も得て実現にこぎつけている。展墓会には大阪帝大や関西大

学の有志教職員および学生らが参列した。西照寺の下寺町界隈は戦時下には戦火に見舞われ西照寺も消失したが後に寺も再建され、「富永仲基招魂碣」および一族の墓碑は今も残っている（羽倉敬尚「懷徳堂回顧録」『懷徳 四一号』昭和四五年一〇月、水田「富永家墓地の現状」に再録）。

湖南の蔵書、小島の蔵書

明治二六年一月湖南は政教社を退社し、大阪朝日新聞の客員（実質は主筆）となった高橋健三の私設秘書として大阪に住んだ。そしてこの時期から鹿田松雲堂刊行の古書目録『書籍月報』などにより盛んに書物を買いはじめた。翌二七年には大阪朝日新聞の記者となり明治二九年四月から同紙に「関西文運論」を連載した。この執筆にあたって湖南は、高橋の文庫で足りない資料については松雲堂（二代古井鹿田静七）から借りて書いていった（湖南「懷旧談」『古典聚目 第百号』鹿田松雲堂 大正一四年一月）。この「関西文運論」は加筆修正のうえ翌三〇年に『近世文学史論』として刊行されている。

ところでこの鹿田松雲堂の古書については、湖南をはじめ濱和助・永田好三郎・水落露石・内越竹三郎・水谷不倒・磯野秋渚ら同好の士らの間で書物をめぐって「面白き暗闘」が繰り広げられた。松雲堂から古書目録が手元に届くとこれらの諸氏はさっと見たうえで競って松雲堂の店頭に向かい、たいていは一冊きりの古書を取り合うのである。大阪市役所で大阪市史編纂の仕事をしていた幸田成友は「暗闘」の手ごわい好敵手湖南のことを、「内藤翁の如きは平素朝寝坊であられるのにこの日に限って殊にお早い」と皮肉交じりで評する（幸田成友「懷旧談」）。ちなみにこの『古典聚目 百号』に懷旧談を寄せているのは、湖南のほか大槻如電・磯野惟秋・幸田成友・今井貫一・亀田次郎の面々である。

湖南は明治二九年八月に郁子と結婚する。三宅雪嶺夫人の花圃に「豊国式の美人」と言わしめた女性である（三宅花圃「内藤博士の追悼」『書藝』第四卷九号 一九三四年）。そして一二月には大阪朝日を退社しておおさかを去る。引き上げるにあたって千余冊の書物を長持ちに入れて船便で東京に送ったのだが、それら書物のほとんどはこの松雲堂で購入したものであった。明治三一年四月にはその後勤めた台湾日報を退いて東京小石川区江戸川町に居を構えたのだが、その家は翌年の火災で焼け、これら大阪時代に松雲堂で購入して蓄蔵に勤しんだこれらの書物も焼いてしまったのであった。

小島はこうした湖南の書物収集のことを、湖南『諸葛武侯』に付された別天生「序文」の「湖南書を購ふに価を論ぜず、苟も一見意に介する底のものあれば、囊を傾くるも購はずんば已まず。これを以て珍籍奇書に富むこと、同人中亦湖南を推して第一と為す也」という文章を引いて紹介する（湖南先生の『燕山楚水』）。小島とても、早い時期から、自分一人で研究ができるだけの素養が出来たなら高知に帰郷してその地で研究を継続しようと考えて京都時代に書物の収集に励んだ人物である。この小島の蔵書について下村寅太郎は、聖護院か田中門前町の家かをはじめ訪れたとき、座敷は書物でいっぱい二人以上の席はなかったと述べている（下村寅太郎「小島祐馬 追悼会での回想」『遭遇の人』南窓社）。そんな蔵

書家小島であるからこそ、湖南の書物蒐集やその蔵書蓄蔵には共感するところも多く、湖南の回想記にその蔵書のことも書いているのである。

小島は湖南が先の火事で蔵書を喪失した次第を記したあと、「先の火災に懲りられたものであろう、田中に居られる頃には旧鈔本宋元槧本など特に先生の珍重せられてゐた書物は一纏めにして大きな風呂敷包みに入れてあった。それは夜分になると夫人の枕頭に置かれ、イザ火事といふ場合には、夫人はそれだけを携へて逸早く逃げなければならなかった」と、郁子夫人に大切な役回りが課せられていたことを紹介している。「夫人はそれだけを携へて逸早く逃げなければならなかった」というこの言い回しの中には、湖南の書物愛惜に対する小島のこの上ない敬愛と共感の念を読み取ることができるかと思う。

湖南がこのように珍重していたこれらの書物だが、湖南はそれを私して骨董視するものでは決してなかったと小島は回想する。小島は校勘のために宋版の『毛詩正義』の拝借を願い出たことがあるという。「勿論風呂敷包の中の書物」である。小島の希望を聞き湖南はそれを風呂敷から快く出してきて、「その取扱方について一言も指図」はしなかった。小島は万一のことを考えて朝に借りて夕べには返却するということを数日間繰り返したのだという。この借り出しが可能であったのはもちろん湖南の小島への信頼が根底にあったわけなのだが、書物をいかに遇することが真に書物のためになるかということを湖南はよく心得ていたということをも示すよいエピソードであると思う。

京都帝国大学教授時代に湖南は、毎週火曜日に田中野神町の自宅で火曜の会という学びの会を持っていた。自宅に教員や学生を招いての会で小島も参加していた。湖南は小島らが訪れたとき、新たに入手した書物を示してその批評をし、それに関する学術上の話もしてくれたという。湖南はたくさんさんの書物を購入していたのだが、湖南はそれらをいつもすぐに読んでいたと小島は回想する。そしてまた何よりも驚くべきことは、多くの学生相手に様々な書物を提示して話をしても、誰々にはこの書物はすでに見せた、この話は誰々にはまだ話していないといったことをすべて覚えていくということであった。小島自身も、湖南から同じ書物を見せられたり同じ話を幾度か聞かされたりしたことはなかった。記憶力については常人の追隨を許さぬということであるのだが、とりわけ書物に関しては記憶の引き出しとでもいえるべきものを無数に備えてあり、それがいつも整然と整えられていたということであるのだろう。

小島が紹介するこうした書物をめぐるエピソードのなかにも、湖南が「門逕」のために書物の出版をおこなったり、図書館創設にあたって初学者が学ぶべき書物を教示したりしたそんな姿勢に共通するものが含まれているかと思う。それは、書物にとってはその面目が立つ形で処遇されるべきでありそのように読まれるべきであるという湖南の書物に対する心配りでもあり、また信念でもあった。そんな湖南の書物に相対する姿勢に共鳴するからこそ小島は、蔵書家で愛書家の湖南に対して敬愛の念のあふれるこうした回想文を綴っているのだと思うのである。

むすび

小島が湖南の論著の解題を書いたものに、昭和二四年一〇月刊行の朝日文庫版『近世文学史論』がある。この解題の中で小島は、ここにいう「文学」というのは、近年のそれとは違って、儒学・国学・小説・戯曲・美術・宗教などを網羅したものであるといい、本書は「近世文学史論」とでも名付けたらその内容に相応するのではないかと述べている。そしてここでも湖南の火災による蔵書焼失についてふれ、この火災でわずかばかり残った書物が支那史のそれであったので以後の研究は支那史と決まった、という湖南から聞いた話を紹介する。研究が支那史と決まったからといってそれは湖南をその枠に閉じ込めるわけもなく、経学や文学・芸術にも明るく、それも文学・芸術については批評だけでなく自身詩文にも長じており能筆であったと評価している。また日本の歴史にも詳しくその学問・芸術・宗教などその道の専門家も驚き目をみはるものであり、湖南は「淵博の学問と高邁な識見とを兼ね備えていたところに、他人の及び難いところがあった」と該博な知識や見識について述べるのである。小島は、文科大学に再入学した時に教授であった内藤湖南のことをこのように回想するのであった。

一方京都市法政専門学校で初めて出会った狩野直喜のことについて小島は、それまでに名前も聞いたことのない先生であったがその講義は明快であり、これまで多くの有名な漢学の先生に教えてもらってきたがこんなに偉い先生と接したのは初めての事だったと述べる。後年学問の師と仰ぐことになる狩野直喜という先生を小島は、「誰からの紹介もなく、また世間の評判も聞かず、自分で自分の先生を発見したのであった」と述べている（『学究生活を顧みて』『思想』一九五三年三月、のち金田一京助著者代表『学究生活の思い出』宝文館 一九五四年）。

このように小島は、内藤湖南や狩野直喜のような、いわば学びの導師に巡り合って仕合せであった。しかしながらそれはもう一方で不幸なことでもあったと小島は述べている。少し長いがこのあたりのことを小島自身の文章から引いてみる。

私が特に指導誘掖をうけた先生がたが、狩野先生や内藤先生や、また河上さんのやうな、傑出した大家であったことは、私にとってこの上もない仕合せであったが、同時にそれはまた私にとつて一つの不幸なことでもあったと言へる。私は先生がたの偉いことを思ふにつけ、私自身の能力についてまったく自信を失った。自分は到底学問研究を大成するやうな能力はないではないかと疑ひはじめた。しかし今更他の道を択ぶこともできないので、いろいろと考へた末、一応自分一人で研究のできるだけの素養が出来たならば、京都を引揚げて田舎に帰り、蜜柑畑でもいじりながら独りで読書研究を楽しむことにしようと思つた。ところがそのためには研究に要する資料を持つて帰ることにしなければならぬ。そこで私はそれ以後つとめて書物の蒐集に心がけることにした。

これは小島の行き方の根幹に触れている発言かと思う。戦後から自身の研究生生活を振り返った文章ではあるが、その心情を率直に表明したものであるだろう。小島は若いころから農業には興味をもっており、農本的な考えを心の奥底に抱えていた。小島家は代々農業

を営む家であり、小島は昭和六年一月に早くも母親伊佐を失い、残された父親がひとり郷里の高知で営々と農業に勤しんでいた。小島はいずれ高知で帰農して父親と共に蜜柑畑を耕し農業をしながら読書と研究に明け暮れたいと考え、京都での仕事はなるべく責任の軽いものを選び、研究に足るだけの蔵書を蓄えようと考えていた。ところがその後「いろいろの行きがかりから」文学部の教授となり、定年を迎えて「やっと帰田の願がかなった」というわけである。

これもその通りなのであろう。というのも、小島の退官一週間ほど前の昭和一六年一月二五日付河上肇からの書簡には、「私は大兄の御帰南は既に数十年前から確立してゐる御方針であると信じて居りますので、人々は是非御止め申すなどと噂して居ましたけれど、所詮その甲斐はなきものとかねてから確信して居りました」と述べており、それが若き日から信頼し合い親しく交友を続けてきた河上の発言であればなおさらのこと、小島の帰郷は早い時期よりの既定の方針であったことも了解できるのである。

このように小島に帰郷という決意をさせたひとつの要因は、狩野や湖南、河上のような「傑出した大家」の存在が身近にいたからであり、自分にはその域に達する能力は到底ないと考えたのだと述べている。もちろんここには謙遜もあるであろうし韜晦した気持ちもないでもあるまい。だがその心情には幾分かの真情も込められているのではないかと思う。そうであるとしたら、それはどのようなものであったろうか。

ここに挙がる三者のうち河上だけは、「河上さん」と表されているように、河上肇は小島にとって知友でありまた師友とでもいうものであった。小島が河上の初期の弟子であったと『河上肇著作集』の解説で書かれて議論となったことがあったが、河上は小島にとって教え教えられる間柄で、互いに敬意を持って近しく交友していた師友であったといつてよい。

狩野直喜は直接の師であり、自分自身のちからで「発見」することのできた先生であった。狩野は多くの著作を残さなかった学者ではあったが、その研究や人となりも小島は心から尊敬していた。小島は中国で教師になろうと決意して中国に渡り、意半ばで帰国することになったのだが、そこで考えたことは、中国の政治や制度を理解するためには古来からの中国の文献を多く読まなければならない、そのためには文献資料がたくさんある京都に帰って「かねてから尊敬してゐる狩野先生の教を仰ぐが最も上策である」ということであつた（小島「学究生活を顧みて」）。狩野直喜という存在があつたからこそ小島は京都にもどり研究をやり直そうと考えたのであつた。狩野は常々、書物を読むには読むこと自体が目的でなくてはならず、何か原稿を書いたり講義をしたりするために読むのであつては、読むことが間に合わせになつていけないということを言っていた（小島「通儒として狩野先生」）。こうした狩野の学問への姿勢に小島は尊敬の念を持っていた。小島にとってこのような通儒碩学の狩野直喜との出会いは、研究者としての道を歩んでいく過程で決定的なものであつた。

ならば小島にとっての内藤湖南はいかがであつたろうか。五高時代の小島が中国遊歴の

旅で湖南の『燕山楚水』を携行したことはすでに述べた。そしてここに記されている中国での教習らに関する記述にも大きく心を動かされ、法科大学卒業後中国に渡って現地で教師になろうと考えたのではないかと述べてきた。そしてその後、まことに偶然なのだが、また巡り巡ってと言ってもよいと思うのだが、小島が狩野に師事して研究を始めようと京都帝国大学文科大学に再入学した同じ年に湖南は教授としてそこに在ったのである。若いころにその著作を読んで小島がその将来を決するのに大きな影響を与えたであろう著者が身近な学びの場にいたのである。

湖南は帝国大学で学問を修めるといふような、いわゆるアカデミズムの人ではなかった。若き小島が深く関心を示してきた政治問題に対して雑誌や新聞紙上で多くの発言をしてきた人物である。大学ではそんな湖南からも多くを学んだわけである。湖南は小島の直接の師ではなかったのだが、このような湖南の存在を、どう言い表したらいいか、周縁からというか、少し離れた高みからといってよいか、そのように周りを見晴らせる位置にいる存在として、小島は湖南の教えを得たのではなからうかと考える。つまり湖南は、狩野とはまたちがうタイプの師として厳然と存在していたと思うのである。

こうした狩野や湖南ら大家に導いてもらうことのできる研究環境は、小島にとっての上もない仕合せであったろう。それも小島が当初に持っていた政治への関心や、後に志した支那学への道を照らしてくれる存在が二人して在ったわけである。しかしながらこうした大家を身近に持ったことは、逆に自身の能力について自信を失うことにもつながったと小島は述べている。そうかもしれないと思う。それほどに狩野や湖南の存在は大きかったということであるだろう。

*

*

今回、小島祐馬の内藤湖南との関係を見直してみても、恩師狩野直喜とのそれは別としても、湖南からの影響は思ったより大きなものがあつたかもしれないと思いついた。小島は明治四〇年七月に法科大学を卒業し中国へと渡つたが、間島問題の勃発によつて現地で教員になることを断念して帰国、明治四二年に文科大学に再入学する。湖南は秋田師範学校を卒業して就いた訓導を辞めて、いくつかの雑誌社や新聞社の記者を経て明治三九年にはその大阪朝日をも退社し翌年に京都帝国大学文科大学にうつり明治四二年に教授となつた。それぞれに、寄り道というか回り道をして明治四二年に京都帝国大学文科大学で巡り合ったというわけである。この寄り道や回り道というところにふたりの共通点があるのだとは思わない。ただこのあたりの交差点は、湖南がそれまでに歩んできた道のり、そして小島がこれから歩んでいく人生の岐路であつたことは確かであろう。

小島祐馬が自分で自分の先生を発見したという狩野直喜への師事といい、多感な時期に書物の中で出会っていた内藤湖南からの直接の教授といい、このようなめぐり合わせはやはり、小島にとっては幸せな出会いであつたと思わざるを得ないのである。

